四七日

よなぬか

戦後すっかりおなじみになった催しの一つに、ミス・コンテストがあります。世界的規模で行われるものから、商店連合会などの地域的な規模のものまで、はたち前後の娘さんが妍をきそい、それぞれのミスを冠した美女がえらばれます。ひところ「八頭身」という言葉がもてはやされたように、あくまでも容姿の上でのうつくしさが美の基準です。ところが、この娘さんの五十年後は、どうでしょうか。残念ながら、それは保障のかぎりではありません。なぜならば、おばあちゃんのうつくしさは、容姿より内面や生き方が問われるからです。

「分陀利華」とは、古代インド語のプンダリカを漢字にあてたもので、真っ白な蓮華を指し、もっとも美しい花とされてきました。そして、み仏の誓願を信じ、大悲に照らされた人は、この花のように美しいとお釈迦さまがたたえられ、それは「我が良き親友」だとさえ語りかけられました。もったいないことです。思えば、生きていく上でつねに人を傷つけ、罪をつくり、地獄よりほかに行きどころのない、この私です。だから「地獄は一定」と述懐された宗祖のお言葉にみちびかれてお念仏を称えさせていただくことは、花のようにうつくしい生き方だといわれるのです。

分陀利華